

社会保障の教育学的アプローチ

48.5.19

留 岡 清 男

社会保障制度の問題追究の道は、いろいろあると思う。社会保障研究所発刊以来、『季刊社会保障研究』や社会保障研究所刊行の図書を読んだり、また時々社会保障研究所に立寄って研究所の様子をきいたりしてみると、早くから経済学的アプローチが押し進められ、やがておくれて社会学的アプローチが仲間入りするようになって、社会保障の制度と運用の研究は、少しずつ掘られ、深められつつあるようである。だが、私はここで、社会保障制度の経済学的アプローチや社会学的アプローチと並んで、教育学的アプローチを、研究分野のレギュラー・メンバーに加えることを希望するのである。

私のように、社会保障制度の片鱗すら見出しえなかった頃、僻地の山村にあって、貧農の生活を保障しえなかったことにヤキモキしながら、あちこちの医療組合運動を見て回ったことのある経験を想起してみると、隔世の感なきを得ないのである。

いつだったか、籠山京君と話し合ったことがある。籠山君は生活保護調査の専門家であるが、おそらく生活保護世帯の実態を調べたり、意識の持ち方に触れたりして、実感したのだと思うのであるが、生活保護世帯に対して、経済的保護の手の差しのべ方はまだ足りないけれども、経済的保護を厚く加えることと並んで、生活保護世帯の意識を鼓舞し、生活保護にぶら下がらないで、少しでも奮い立つようにする工夫はないものだろうか。お互いは大学の教育学部にいるけれども、そういった社会保障に対する教育学的研究は皆無だし、それに手をつける試みはできないものだろうか、といって、なかば慨嘆し、なかば慫慂し合ったのである。

私は若かりし頃、山村にあって、推されて部落長をしたり、産業組合長をしたことがあるが、一番気にかかり、一番心を痛めたのは、資金を増殖し、組合経営を活潑にすることよりも、組合員をして自分の組合の経済力の限度を知らしめ、組合員は組合にぶら下がるものではなく、組合を下から支えるものであるという意識を培い、それを日常の実行に移すことであった。組合月報を出したり、組合座談会をひらいたりしたのも、そのためであるが、実際は思うように捗らなかった。

社会保障制度は、もともと厚生施策の保険組合から発祥し、国政の規模に拡大するに至ったのであるが、規模が拡大されることは、それだけ発達の進捗を示すわけだけれども、同時に組合組織の根本精神であるところの、お互いは下から組合を支え護るという意識が稀薄になり、そういった努力が失われる危険性を孕んでいる。医療保険制度は拡大したが、医薬費が乱費されたり、失業保険制度は普及したが、失業保険の悪用が跡を絶たないなどということは、日常茶飯の嘆きである。こういった嘆きは、社会保障問題の研究に対して教育学的アプローチを必要ならしめる所以であって、教育学的アプローチというのは、そういった簡単な、何の変哲もない、しかしながらいつも後回しにされ勝ちな分野であり、そういった分野に心を配る配り方を研究していくことにはほかならないのである。言葉を換えていえば、教育学的アプローチというのは、社会保障制度の必要と、現状の不整備とについて、人々の意識を先取りさせる工夫と技術であり、また社会保障制度の実施に当たって、無駄と悪用とを防ぎ、積極的に参加協力する意欲をかき立てる工夫と技術とにほかならないのである。